

うめまちの隠れ切支丹(一)

柴川 英敏

(会員 宇目町下小野市)

はじめに

世の歴史学者の多くが、「古キリシタンの死後、残ったキリシタンはすべて処刑、或は転び、江戸中期以後キリシタンはいなくなつた」としている。

したがつて、転んでも心は転ばず密かに潜伏して信仰を守つた人々、いわゆる「隠れキリシタン」の存在を否定している。はたしてそうであるうか。宗教とはそんなに信仰したり棄教したり簡単に出来るものであろうか。

禁教令が出たとはいえ、そうすんなりと取り替えることが出来ないのが人の心であろう。ましてや当時は科学や医学も発達していない時、神や仏に祈れば助かるぐらいにしか考えていなかった時代である。

そんな中でキリスト教と共にもたらされた西洋の医学や科学は、まさに魔法のごとき存在であり、また精神面においても封建社会の考え方と違い、人間愛を説くキリスト教は人の心を魅了したのである。

一五四九年(天文一八)にキリスト教が伝来して以後、キリスト教の信仰が厳禁されていた江戸時代に、迫害と弾圧に耐えながら潜伏して隠れて信仰を守り通した勇氣ある人々がこの宇目郷にも多数いたと思われれます。

当時この宇目郷は、山また山に囲まれた想像以上の辺境の地で、地理的に隠れてキリスト教を信仰する場所としては絶好の地であつたと思われれますが、その実態はまったく明らかにされていません。

キリシタン達は当時は西洋文化を享受できた最先端にいた人達でしたが、不幸なことにキリスト教は禁教となり、相次ぐ弾圧に転宗した人も多数いました。また転宗したと見せかけて信仰を続けている者もいました。前者を「転びキリシタン」、後者を「隠れキリシタン」と呼んでいました。これらの人々は、普段は何の変わりもなく、仏教徒として生活をしていました。

彼らが残した遺物は隠れキリシタンが最も多く居た長

岐阜県高山市、熊本県天草町などに劣らないだけの物があ
り、これを明らかにして信仰の実態を詳らかにしたいとい
思っています。

今回の調査で、キリスト教を信仰している事が役人に
露見したら苛酷な処刑があることを承知のうえで、それ
でもなお信仰を捨てなかつたすさまじいまでの信仰の深
さと執念の証を見て驚嘆しています。彼らが如何にして
信仰を守り、如何にして子々孫々に伝えていたかを歴史
的背景と地域的諸事情を探りながら調査研究し、隠れキ
リシタンの証としてまとめてみました。

しかしながら、私自身キリスト教の専門学者や仏教の
専門学者でもありません。専門の方々のご指導をいただ
きながら、県内はもとより天草、人吉、日南市及び兵庫
県加西市等を現地踏査し、本町の遺物と比較しながら試
行錯誤の中で作成しましたが、非才浅学のため歴史認識
の誤りや視点観点の違いがあるかも知れませんが、隠れ
キリシタンの歴史について読者の皆様のお手伝いができ
れば幸いと思っております。

「山の神」の神像



異相の「山の神」の神像
(日本人とは思えない顔をし、持つ
てるものは山の神が持っているもの
と違う。〈宇目町上津小野〉)

打ち続く戦乱で宗教が翳りを見せ始めた十五世紀中頃
でしたが、儒教・仏教とは別の博愛と平等を説く異質の
精神文化をもつ宗教のキリスト教が日本に入ってきた。
合理的精神を基盤とした西洋思想は戦国の世にあつ
て、常に生命の不安にさらされ、極貧にあえぐ人々に支
持された。既存の宗教が宗教の本質から外れていた時期
であつたので、国民はキリシタンの魅力に惹かれて信仰
の道に入つていった。

日本布教に力を入れた宣教師達の学識は、日本仏教の
高僧の比ではなく、社会人としての物の見方考え方にお
いて、日本の高僧の追隨を許さぬものがあつた。まして



前面には「不教塔」とあり、左横に十二月廿九日とある。この十字三個は後で彫るために、わざと二月九日と間隔をあけている。これも三位一体の表現である。(宇目町重岡)



尼僧の墓碑

(上の「卍」は三位一体を表現している。日本の一般墓にはこのようなことはしない。〈宇目町上津小野〉)

やその宗教が既存のものにない精神文化面を有し、宣教師自らが宗教の教師だけに留まらず、キリスト教の教義以外に、一般倫理の事まで教えていたからで、既存宗教には無い教えを持っていたこともあって、信徒もその気になって信仰を護り続けたものと思われる。

上津小野区の山中の尾筋に写真のような青銅で出来た高さ三〇センチの像がある。地域の人達はこれを「山の神」と呼び獵師や山師が崇拜している。この場所は人家から5キロ位離れた険しい山の尾筋にあり、普段は人が通るような所ではなく、たまに獵師や樵が通るだけの場所である。

本町は言うまでもなく山岳地帯であるため、山岳宗教が盛んであったことをうかがわせ、尾筋・谷・山の境界などに多数の山の神が祀られている。その形状は祠・石室・石殿など、その中に楕円形の川石のようなものを置いているものが大多数を占めており、このような人物像のものはほとんど見あたらない。どうして山の神の神像がこの場所にあるのか地域の人達も知らないという。

見ての通り髪にはウェーブがあるけれども、日本人の髪形にはこうしたウェーブがかかったものではなく、眉毛

は濃くてつりあがり、眉毛と目の間は外国人の顔を見るように近く、目はらんらんと輝き、鼻は高く髭はカイゼル髭であろう。一見して日本人の顔とは思えない異様な形相をしている。

さらによく見ると、首に掛けている数珠のような首飾りはロザリオと思われ、その中央胸部の部分に三個の珠で十字を表しているようである。

また、数珠が三個縦に並んでいるものが両肩にあり、そして胸に数珠が三個横に並んでいる。「三」・「△」^{「。。」}など、三という数字を表していることをキリスト教では三位一体のしるしという。

三位一体とは、教会でミサの始めには必ず「主イエスキリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんと共に」と祈りが唱えられる。つまり「父は子と精霊」のことをいい、これはキリスト教の基本原理で、キリシタンであればこれを知らない人はいない。

さらに両腕で丸い球を持ち、その球の中に横に三日月を彫っている。「○」や「円」は、これは本来禅宗のシンボルに相当するもので「大円鏡智」の意味であるといわれているが、キリスト教では「天」の印として使われ

ていて、戒名の中では「○」が「円」という字でよく使われている。

またその球には「三日月」が刻まれているが、月はその満ち欠けの神秘現象や美しさから、太古の昔よりいろいろなものに象徴され、旧約・新約聖書と受け継がれ、古いヨーロッパの聖母画には三日月が必ずといってよいほど出てくる。

三日月は古来より処女神ディアナと月の神ルナの象徴であった。この女神の純潔の象徴はキリスト教時代にも引き継がれ、「無原罪の御孕り(やどり)」の聖母は、しばしば三日月を足の下に踏まえた黙示録の女に結びつけられた。(黙示録十二の一)特に下向きの三日月は、純潔の聖母を象徴するという。

日本のキリシタンは、このマリアの象徴として「月」を石灯籠や庚申塔、墓碑などに描いたり、戒名に「月」という字を使っている。又「お月様」や「庚申様」「二十三夜講」「十九夜講」などと称し、習合信仰としていたケースも全国的に報告されている。

こうしたことから、この像は隠れキリシタンが山の神を信仰すると見せ掛けて、キリストやマリアに見立てて

崇拜していた偽装仏ではないかと思われる。

これについて浜崎献作著「かくれキリシタン信仰の証」によれば、キリスト教の「○」・「円」はデウスまたはキリストを意味し、これを禅宗の大円鏡智に偽装した。さらに両手には宝珠に似せた「球」を持つていたが、これもデウスやキリストを表している。日月(○)も一緒の場合が多い。

旧約聖書では神、季節と日と年を分ける印として太陽と月を創造し、昼を太陽に、夜を月につかさどられた。(創世紀の一の十四)六世紀頃からキリスト教美術では、磔刑図中のキリストの頭上に太陽と月が配された。

また、両胸はブドウの房のようである。キリストはよくブドウの樹や房にたとえられるが、それはヨハネ福音書十五の一「私はまことの葡萄の樹：」や同書十五の五「私は葡萄の樹でああなたがたはその枝である」から由来したものとされ、その作例は初期のキリスト教時代の石棺、ローマのカタコンベ(地下墓所)や壁画、ビダンチンのモザイク、中世のステンドグラスや石彫刻などに見出される。

聖アウグスチヌスは、死によって人間の罪を贖うキリ

ストをブドウ搾り機にかけられる「神祕のブドウの房」にたとえた。そして、搾り出されたブドウ酒は、十字架上で五つの聖痕から流れ出る血とみなされた。このようなどことからブドウはブドウ酒を象徴するものとなり、ひいてはキリストその者も象徴した。

最後の晩餐では、キリストが来るべき受難を予告して杯を取り、感謝して弟子たちに与え「契約の血」と宣言する。(マタイ福音書二十六の二十七)

このような象徴から教会ではブドウ酒を飲むことを典礼の中に取り入れ、最も重要な部分に位置づけた。これは「聖体拝受」と呼ばれ、キリストの恩寵を受ける儀式の「七秘蹟」の中の一つとなった。そしてこれに用うる杯を「聖拝」(カリス)と言う。

キリストの磔刑図では、五つの聖痕から流れ出る血を杯で受ける光景も描かれた。中世後期にはブドウの樹を十字架とみなし「生命の樹」とも呼ばれた。

日本のキリシタンもこれらの重要な場面は知っていたようで、カリス(杯)やブドウ、それにキリストが最後の晩餐のときブドウ酒と共に聖体として与えたパンまで描き込んでいる。又ブドウの蔓を生命の樹とみなしキリシ

タン仏に描き込んでいるケースも多い。

この神像について、写真による鑑定を浜崎健作氏に依頼したところ、次のような理由でキリシタンが崇拜している偽装仏(キリシタン仏)である可能性が極めて高いとのことであった。

一、異相にしてまた異装

二、両腕で○印を作る

三、数珠に偽装した十字付きのロザリオ

四、両手で捧げているのは三日月に見える

五、髭がある。

六、両腕はブドウの房のようである

七、仏像ではなく日本の神像に近いが異相

さて、これだけではキリシタンの偽装仏とは断定できないが、近くにはキリシタンのものであるうと思われる聖職者がかぶる「ケパ」(帽子)をかぶり、その後ろにはキリストが磔つけになるとき、両手と足に打ちつけられた三本の釘、「☪」(月日)青面金剛像、卍のある墓碑、棕櫚紋様墓碑、菊紋様墓碑或いは三位一体を表した墓碑等が多数あるところから、キリシタン偽装仏に間違いはないと思われる。

(つづく)

中ノ谷峠

弥生町宇藤木と野津町との境にある峠。別称川登峠ともいう。標高二六五呎。この峠は昭和三十八年(一九六三)年に中ノ谷トンネルが開通するまで国道一〇号線が通っていた。

寛政七年(一七九五)佐伯に松下筑陰を訪ねた広瀬淡窓(当時一四歳)も、『懐旧楼筆記』に「うつそうとした山林に靈気がただよとおかみの速ばえにひとしお身のひきしまるのをおほゆ」とある。

この峠道は明治二十五年(一八九二)から四年がかりでドイツ人技師の指導によって建設され、明治三十年に国道に編入される。土地の人たちは、この峠をナカクタニと読む。それにひっかけて「泣かん谷こそ泣く谷よ」といわれた難所。佐伯・南郡から海産物が、逆に大野郡から米麦が、馬の背につけられて峠を越した。また、出征兵士を見送る村の人々は峠の頂上で「元気だな」と涙のわかれをした。

一頭だて六人乗りの客馬車も走った。大正末にはそれが姿を消し、代わりに昭和の初めから六人乗りのフォードのバスが通うようになった。この国道は大正五年(一九一六)、国鉄日豊線が佐伯駅まで開通するまで、大分と県南地方を結ぶ動脈だった。(『弥生町誌』)